



愛光NEWS

2021年2月

2021（令和3）年3月12日発行

（編集）愛光本部総務部

（TEL）043-484-6391

（メール）<http://www.rc-aikoh.or.jp/>

春の到来を感じさせる季節となり、敷地内の梅の花も満開に咲き誇りました。

そんな中、2月13日夜11時過ぎ、突然激しい揺れと、同時に携帯電話の緊急地震速報が鳴り響きました。揺れはしばらく続き、もしやと身構えた方もいたのではないのでしょうか。震源地は福島県沖で、震度6強。今回の地震はあの3.11の余震ということでしたが、幸い大きな被害はなく、安心しました。10年ひと昔といいますが、まさにあの体験を風化させてはならないと実感し、事業継続計画や防災意識を持続し、気持ちを引き締めなければと改めて考えた出来事でした。

□事業経過など（2021.2.1～）

月/日(曜)	記 事
2/2(火)	内部登用試験
2(火)	新型コロナ緊急事態宣言10都府県で3月7日まで延長
3(水)	感染症アドバイザー研修
3(水)	新型コロナに対応する感染症特別措置法改正
4(木)	業務執行理事会
9(火)	感染症委員会・衛生委員会
10(水)	サービス責任者会議
11(木)	建国記念日
12(金)	東京五輪・パラリンピック組織委員会森会長辞任
13(土)	福島県沖地震で福島宮城県で震度6強の地震発生
16(火)	コンプライアンス委員会
17(水)	施設長会議/業務執行理事会/広報委員会
17(水)	新型コロナワクチン先行接種始まる
18(木)	メンティ交流会
18(木)	東京五輪・パラリンピック組織委員会橋本聖子氏就任
20(土)	全豪オープンテニス大阪なおみ優勝
24(水)	施設長会議
25(木)	業務執行理事会
26(金)	グループ法人協議会（千葉県視覚障害者福祉協会）
28(日)	新型コロナ緊急事態宣言関西6府県で解除



■おもな出来事

□インフルエンザワクチン接種報告

今冬の新型コロナウイルスと季節性インフルエンザの同時流行（ツインデミック）を危惧して、WHO（世界保健機構）は、インフルエンザワクチン接種を呼びかけました。そこで法人では、感染症防止の観点からインフルエンザワクチンを接種した職員全員に、助成（1人2,000円）することにしました。結果、対象職員353名中、288名の接種、接種率は82%でした。ただ残念だったことは、入所施設等の一部で接種率の低い施設がありました。幸いこの冬は、新型コロナの影響で季節性インフルエンザはほとんど発生しませんでした。日頃の感染症対策の意識を問われる案件でもありました。

□高齢、障害施設で職員のPCR検査

千葉県では、国の「新型コロナウイルス感染症対策の基本的対処方針」等を踏まえ、高齢者施設及び障害者支援施設に従事する職員に対して、唾液によるPCR検査が行われることになり、法人でも取り入れることにしました。これは入所施設でのクラスターを未然に防ぐことを目的に行われるものです。今回の唾液による検査で陽性が判明した場合は、嘱託医を通じて保健所に連絡し、その後は保健所の指示に従うというものです。

厚生労働省の調べでは、3月1日時点での累積のクラスター件数は、高齢者施設等で1,089件と最も多く、飲食店が972件、医療機関が920件。高齢者施設等では、昨年10月26日時点では215件でしたが、現時点では5倍に増加しているとのことです。ただ今後の検査の頻度や対象はまだ不明瞭で、厚労省は3月の実績を踏まえて検討するようです。今回の検査で、職員全員が陰性であれば現時点での安心材料にはつながります。検査の実施日時は、3月4～5日はちす苑、8日リホープ、11日ルミエール、めいわです。

□新型コロナワクチン接種の事前調査

医療従事者を中心に始まった新型コロナウイルスワクチンですが、その供給や副反応等で話題はつきません。現状での接種予定では、65歳以上の高齢者が4月以降、高齢者施設等に従事する職員が6月以降ということで、その対応は各自治体に任せられています。2月、佐倉市では、ワクチン接種の事前準備としてはちす苑と障害者支援施設ルミエール、めいわ、リホープにアンケート調査が届きました。アンケートの内容は、はちす苑（協力医による接種人数、市外に住み票がある人の人数、職員の同時接種の希望の有無）等、障害者支援施設（65歳以上の人数、基礎疾患患者の人数）等でした。クラスター発生予防のためにも、早めのワクチン接種が望まれます。

■月報から

□ホームページリニューアル（本部総務部）

26日（金）法人の新しいホームページを公開。今回のホームページのコンセプトは、2018年に作成した愛光のパンフレット“AIKOH VISION BOOK”とリンクしたこと、他法人との差別化で付加価値を考えたことがあげられる。現在は微調整をしながらの運用で、今後ブログ機能の充実をはかる予定。リクルートを含めた誰もが見やすく、親しみやすいホームページ作成を心がけた。まだ、見ていない方はぜひ一度ご覧いただきたい。

<https://www.rc-aikoh.or.jp/>

（事務局長 池田 浩一）



□節分行事食（栄養管理室）

○「ちらし寿司」・・・1年は365日6時間とされていて、1年間に6時間ずつ遅れが生じている。「この日から春がくる」という意味が込められている立春は、例年2月4日であるが、その時間のズレを修正するために今年は2月3日になった。立春の前日である節分も2月2日に変更され、実に124年ぶりのことだそうだ。

障害者支援事業部では、「ちらし寿司」を節分の行事食として提供した。色鮮やかなちらし寿司は見た目にも華やかで、食欲をそそる献立のひとつだと思う。利用者の皆さんは喜んで召し上がっていた。行事食は利用者に季節感を感じていただき、単調な施設生活の中に変化と潤いをもたらす献立が求められる。今後も、利用者に「食べたい！」と思っただけのような献立を工夫し提供していきたい。（障害者支援事業部管理栄養士 武石 美紀）

○「恵方巻き」・・・高齢者福祉事業部は、「恵方巻き」を節分の行事食として提供した。恵方巻きは福を巻き込み福が逃げないように無言で食べる巻き寿司のことだとわかった。はちす苑は健康長寿の願いを込めて、かんぴょうやでんぶ、煮椎茸など昔ながらの煮しめの具材を用意した。酢飯にするご飯の水加減を軟らか目にするか悩む。炊きあがったご飯に一気に合わせ酢を振って飯と合わせて団扇で仰ぐと表面にピカッと艶がでて、米粒に甘めの酢が絡んでいる。少し冷めたところで薄焼き卵に酢飯と煮しめた具をのせて巻いていく。お稲荷さんと合わせて用意した。

普段は粥食の方でも、行事の時の太巻きは食べたい意思がある方はできるだけ希望に沿うようにしている。その時の体調と嚥下の状態を看護師と職員と一緒に検討する。酢飯は利用者の心をそっと包んでくれるようだ。恵方巻きは、お祝いごとのようだと喜んでくれた。午後からは「鬼は外～福は内～」の利用者の声が聞こえてきた。食べた恵方巻きが、利用者の身体の中でエネルギーの源に変わっているのだと実感した。

（高齢者福祉事業部管理栄養士 江口 貴子）

□LINE WORKS（ルミエール）

震災時等において不通となりえる電話に代わる通信手段として、以前より検討していたLINE WORKSをはじめてみた。防災委員が主導し、事前に説明とアンケートを実施して職員に任意での登録であることをわかってもらってから運用を開始した。多くの職員が登録して、どのように運用していくか考えていたところ、深夜に緊急地震速報が流れ施設長から職員、施設への安否確認が行われた。登録している職員、夜勤者からはすみやかに返信がありどこも被害がないことをわずか数分で確認することができた。より迅速で正確な情報伝達ツールとして今後も施行を重ねていきたい。（法人では、SNS等を活用した災害時等の一斉通信手段を検討中）

（ルミエール課長 原 宏之）

□災害訓練（めいわ）

11日（木）、災害訓練を行った。災害に備えた避難訓練は、毎年継続的に行っている。しかし、避難したあとも災害による混乱は続く。地震、台風、大雪などで、水や電気が止まり通常の生活ができなくなる。また職員が集合できず、通常の支援ができなくなる可能性がある。そこで、そのような状況を想定し、職員にとっては冷静に対応できる知識と行動力を身に付け、利用者には停電時や非常食の体験をし、実際の災害時に起こり得る状況を予め経験してもらおうというもの。訓練時間は午前11時から午後4時までであった。

訓練では、11時に大地震が発生し、めいわ建物内の安全確認ができているが、ライフラインの水と電気が止まるとした。その時間帯では、食事（昼食）やトイレ利用などもあるため、備蓄倉庫から優先的に何を取り出すかが決まる。昼食は備蓄倉庫から水、非常食（アルファ米）、ガスコンロ等を持ち出した。トイレに関しては、簡易トイレとランタンを用意した。利用者には訓練であると伝えてはいたが、水と電気が止まっている状況のなかで比較的落ち着いた行動で協力的だった。

10年前の東日本大震災1ヵ月前の訓練としての意味も大きく、いざ災害が起きたときに「リスクを最小限にした優先順位」を決める動きについては、常に意識の中を持つ必要があると考える訓練だった。

（めいわ課長 李 連淑）

□がん治療（リホープ）

12月に大腸がんが見つかり、人工肛門を造設した利用者が1月末に退院した。がんの治療（手術）は難しいとの判断で、がん治療は行わず、人工肛門を造設することで、長い期間ではないがこれまで通りの生活を続けられるとの診断であった。余命をどう生きるか、ご本人の意向に沿いながら支援していくことにしていた。

その後、人工肛門を造設した病院からの診療情報提供書を持参し、近隣の病院を受診した際、がん治療を勧められた。「長生きしたくないのか」との問いかけに「長生きしたい」との意思表示が利用者よりあった。別の病院を紹介され、がんの治療について話を聞いた。手術の意思を固めたが、入院予定日より前に発熱、炎症がみられ入院することになった。その後、19日に大腸がんの切除手術を行った。今後、人工肛門をなくし、腸をつなぎ合わせる手術と肝臓に転移したがんの治療について検討することになった。

医療的なことについて患者は医師の診断、説明を聞き、その中で判断するしかない。本当であればセカンドオピニオンも必要だと思うが、コロナ禍ということや施設からの通院を考えると、なかなか難しいというのが現状である。ご本人にとって何が最善か、ご本人の意思に沿いながら考え、支援していきたいと思っている。

（リホープ課長 稲垣 直子）

□先輩からの言葉（佐倉市よもぎの園）

27日（土）よもぎの園、ワークショップかぶらぎ合同で池田副理事長を招き“共に生きる支援を”と題した講演があった。講演では、法人の歴史や福祉の基本姿勢など経験談を踏まえながらお話しいただき、その内容に皆引き込まれた。支援方法など手探りの時代、利用者を支えてきた先輩達の経験は今の私たちには想像し難い。しかし不変であることは“障害があってもなくても”常に同じ目線で向き合い、信頼関係を構築していく大切さであった。

「一番身近にいる我々が利用者の気持ちをわかってあげなくて誰が理解してあげるのか」と池田副理事長は私たちにメッセージを送ってくださった。我々はこの想いを愛光の職員として引き継いでいきたい。

（佐倉市よもぎの園主任 近藤 真一）

□採れたてホヤホヤ（根郷通所センター）

コロナ禍のため日中活動を入所施設と独立し、根郷通所センターだけで開始して9か月が経過した。農耕作業がなくなり、それまで従事していた利用者からの惜しむ声に、発案したのが通所センター前の園芸班が植栽していた土地を開墾し、菜園として運用することであった。土の掘り起こしから始め、苦土石灰や肥料を入れて耕し、ペーハー調整も行った。

こうして生まれ変わった畑に、初心者にも育てやすい“二十日大根”と“ほうれん草”の種まきを12月に行い、トンネル栽培を開始した。だいぶ暖かくなってきた2月、スクスクと成長した二十日大根を午前中に皆で収穫し、浅漬けの素に漬け込んだ。そして、できたての浅漬けを給食と一緒に食べた。採れたてのためか、二十日大根独特の苦みもなく、あっという間に売れてしまった。別の日には、ほうれん草を収穫し、お浸しにして皆で食べた。

今は、絹さやを栽培中で、利用者は皆、4月の収穫を待ちきれない様子で、毎朝登所するたびに「まだかまだか」と、成長の様子を観察している。規模は小さいながらも利用者にとって、家庭菜園の楽しみが、根郷通所センターへ通う楽しみの一つになっている。

（根郷通所センター主任 高梨 和憲）

□1年間の経験から（ワークショップかぶらぎ）

一般就労を目指してワークショップかぶらぎの自立訓練を利用している男性がいる。利用開始当初、就労アセスメントツール「就労パスポート」の記入を行った。記載内容は主に「体調管理」「希望する働き方」「必要な配慮」となっている。

今月、利用開始から約1年が経過した段階で改めて就労パスポートを見直してもらった。すると“自分なりに〇〇して工夫している”といった内容が随所に追記された。

かぶらぎでの作業活動を通して“障害があっても働く”を実践していると、必要な配慮を得る経験だけでなく「自分なりの工夫」を考えて乗り越えるべき場面にも遭遇する。今回その成果を就労パスポートに書き込むことができた。本人はこの春頃に就労へ向けた次の展開を考えているようである。

（ワークショップかぶらぎ主任 宮部 和樹）

□もう一度見直そう 一目で分かる対応策を（はちす苑）

当月、重大な事故（人間違いの誤投薬 援助中途での放置）が発生した。誤投薬については「思い込みによる確認忘れ」が大きな原因としてあげられる。平成30年11月に発生した人間違いの誤投薬事故から2年3ヶ月、マニュアルを更新するなど職員一丸となって誤投薬事故を防ごうと努力してきた。特養・ショートにおける投薬回数は1日に約180回、180回×365日で年間約65,700回。1回も間違えずに65,700回、服薬介助を実践することは、非常に厳しいと言わざるを得ない。確実に間違いを発見できる機械による管理、服薬管理システム導入が必要である。

放置については、タイマーの設定ミスなど、様々な要因はあげられているが、一番の要因は「職員の失念」である。失念は「途中で利用者に声をかけられた。ナースコールが鳴った」など、利用者対応が急に舞い込み、それに対応している間に、初めにしていたケア業務を忘れてしまうことで起こる。忘れていることを思い出させる何らかの策が必要であるが、タイマー等以外で、複雑ではなく一目で分かるような方法にしなければならない。現在、簡易ライトをケア中の部屋（トイレ）の壁などにかけられるようにし、ライトがついている部屋（トイレ）は「介護の途中です」と、視覚で捉えられるようにし、放置事故をなくす方法を試験的に行う予定である。利用者が安心して安全に暮らしていけることを第一に考え、苑全体でリスクマネジメントへの意識をさらに強化しなければならない。

（はちす苑課長 戸室 輝大）

□佐倉市に移動販売車がやって来た！（総合相談センター）

18日（木）、市内8か所で、週2回ヤックスによる移動販売が開始された。南部圏域では「城」地区2か所と「山王」地区の3か所で行うことになった。いずれの地域も近くにスーパーがなく、買い物に困っている方が多い地域である。当日は販売車が来る時間前からすでに待っている方も多く、行列を作るほど盛況であった。

住民の方からは、「ちょっとした物を買うのに遠くに行くのは大変だったから助かる」「家族にお菓子買ってきてなんて言えなかったのよね」「久しぶりに近所の方と会っておしゃべりができた」といった喜びの声が聞こえてきた。

後日、ヤックスの担当者と市内地域包括支援センターの生活支援コーディネーターで情報交換会を行った。ヤックスの担当者からは、佐倉市が過去の実績の中で一番反響が大きかったこと、今後別コースの検討をしていくことなど、今後の展開についても聞くことができた。生活支援コーディネーターからも住民側の意見を伝え、お互いに買い物支援の重要性を確認した。今後も協力して、情報共有していけるよう連携していきたい。

（総合相談センター所長 森 由美子）

□あと何回来れるかな（学童保育所）

子どもたちは、コロナ対策の換気と花粉症の狭間で、百人一首に燃えたり、あやとりで新技を編みだしたり、これまでなかなかできなかった二重跳びに挑んだり、鉄棒でギネス記録を目指してクルクル回り続けたりと、それぞれに情熱を燃やしている。4月に不安でいっぱいだった1年生も自分の思いが言えるようになり、もうすぐ来る進級を楽しみにしているようである。卒業生は、あと何回学童に来るだろうかと指折り数え、感慨深い。いつにも増して、一日一日が大事に思える3月である。

あと、ほんのわずかで、また新しい風が吹き込んでくる。

（学童保育所主任 齋藤 理江）

□緊急事態宣言下の中で（南部地域福祉センター）

「2時予約ね」と毎日のようにお風呂の予約に来所する利用者がある。「お風呂沸かしておいて」「水だったら・・・」等々。現在、閉館していて入浴できないことはわかっているが、毎日冗談を言いながら、センターに顔を出しにくる。佐倉市南図書館の利用もしている方だが、現在は図書館の椅子もなくなり長居ができなくなっているとのことで、散歩をしても時間を持て余しているようだ。センターの開館を楽しみに待っている方が多くいらっしやることを期待して、緊急事態宣言の解除を待ちたい。

「開店休業中」の利用は行政等のみとなっているが、行政の会議が沢山入っているわけではない。これをチャンス！と思い、細部の掃除を行ってきた。各部屋の空調や換気扇の掃除から始まり、浴室の壁や天井、窓のパッキンのカビ取り。窓ガラスは業者も入り、清掃を行ってもらっているが、窓枠は場所によってはカビていたり、コケがついているところもある。取れない汚れもあるが、きれいになると部屋も明るくなった。ほこりは、令和の物ではなく、平成か昭和か！？と思うほど厚みがあるものもある。前はいつやったのか？？今後は定期的にしっかり行える仕組みを作っていきたい。

（南部地域福祉センター所長 横川 民夫）

□春の珍客（南部児童センター）

(1)よう君（20歳・仮名）

児童センターの玄関に、スーツ姿の男性が立っていた。業者の方かと対応すると、1月に成人式を迎えたよう君だった。小学生の頃から一人であそびに来ていて、何をやるわけでもなく、インストラクターとの会話を楽しんでいた。高校卒業後、アニメの専門学校に進んだが、なかなか友だちができず、学校にもなじめないと、悩んでいた時期もあった。

この日は、就職面接の帰りに立ち寄ったとのこと。「こうほう佐倉」で、よう君が成人式の実行委員をしていたことを知っていたので、「かっこよかったよ。面接でアピールした？」と尋ねると、緊張していて忘れていたと苦笑い。来館していたママに紹介すると、「先輩だね！かっこいい。」と声をかけられ照れていた。3月中旬には、2次面接。どうか、素朴で真面目なよう君の進路が決まりますようにと祈るばかり。

(2)ゆう君（18歳・仮名）

ロビーの掲示板をじっと見ている男の子。よく見ると、毎日のようにあそびに来ていた18歳のゆう君。昨年3月以来、約1年ぶりの来館。中学生の頃は、借りたい遊具の待ち時間が長いとイライラして、インストラクターに暴言を吐くこともあった。

長期休みや土日は、朝から閉館まで、ロビーで昼食を摂りながら児童センターで過ごしていた。「ひま！」とつぶやくゆう君と仲間たちを、乳幼児対象の「夏まつり」のボランティアに誘ったことがあった。「行けたらね」の返事と裏腹に、当日は朝早くから、スティッチの着ぐるみを着て登場！「太鼓の達人」「かき氷」コーナーで、小さい子の目線にあわせて優しく接する姿が見られた。

高校卒業後、仙台で働くことが決まったとの報告があった。以前、所長から、しっかり勉強すれば、学童保育所で働くことが出来ると言われていたことを覚えていて、迷ったと話していた。「休みの時は、夏まつり手伝うよ。先生もがんばって！」と、言って帰って行った。

指定管理になり、まもなく7年が終わる。中高生の居場所づくりとして、まずは全面的に相手を受容するところから始めて来た。「クソババア！」と言われれば「クソ」を取って、「ちゃん」をつけてね！（ばばちゃん）などと返してみた。子どもたちは、怒られるかと思いきや？拍子抜けしてしまったようで、一緒に笑ってしまったことも。心配な子は、何歳になっても気にかかる・・・何かあった時に気楽に立ち寄れる場所。そんな児童センターをめざしたい。

（佐倉市南部児童センターインストラクター 鈴木 信子）

■職員状況（2/28現在）

	人数	前月比
正職員	173	
サポート職員	39	
非常勤職員	144	+2
計	356	+2